

五位組組長退任挨拶

長光寺 住職 織田隆夫

平成十九年四月より就任いたしておりました五位組組長を本年三月をもって退任致しました。九年前二期にわたり五位組の皆様には大変お世話になり心より感謝申し上げます。あつという間の九年間でありましたが、思い返してみますと、教え切れないほど多くの苦難と感動の連続でした。

私が組長に任命されたのは、本願寺「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」の二年前で、この大法要を前に五位組役員を一新し、新たな時代に対応しえる力強く体力のある組織にしたいとの先達の願いからでした。しかし時代は私達が考えている以上に早く変化してゆきました。本願寺も末寺も門信徒も力をふりしぼって大遠忌法要に尽瘁（じんすい）した結果、法要は成功裏に終わりましたが、その後の宗門の未来展望は未だ暗雲の中です。

今まで人々の心の中には、お寺は、僧侶はこうあってほしいという願いがありました。しかしこの十年間でその淡い願いも薄れ、宗教そのものに無関心な人々が大半をしめ、人々は自分自身の生命と向き合い生きていこうとする力さえ失いつつあります。「死んだら終わり」の世界が蔓延した混沌とした時代

五位組だより

2016年
（平成28年）
5月31日

念仏のこころに生きる生活を

浄土真宗本願寺派
高岡教区五位組
題字・織田隆夫

代なのかもしれせん。

現在五位組は十八ヶ寺で構成されており、実際に寺院活動を行っているのは十六ヶ寺です。各寺院は門信徒の支えと住職の熱意によって地域にねぎした宗教活動を行ってまいりましたが、今では一つのお寺だけでは崩れゆく意識を支える体力さえも失いつつあります。その様な時代背景の中、私はこの九年前「チーム五位組」をテーマに活動を行ってまいりました。総ての五位組寺院、門信徒が同じ問題意識とテーマを共有し、相互関係を密にし、ネットワークを築き、変わりゆく社会意識の中、変えることのできない「生老病死」にお念仏一つで毅然と向き合う勇氣と励ましを頂いていく活動です。二十五日講も平等講も蓮門会も門徒推進員も仏仕婦も総ての教化団体が「丸」となつて「生命終えても終わりにならない世界」を目指すチーム、それが「チーム五位組」です。

果たして、この九年前で何ができたのかはわかりませんが、組長を退任しても「チーム五位組」のメンバーとして生命あるかぎり門信徒の皆様と支え合い励まし合い歩んでいきたいと思うと同時に、新組長になられた珉照寺山岸智史住職と新役員にこの願いを託し、若い方々の活躍を心より念じ退任のご挨拶といたします。

五位組組長就任挨拶

珉照寺 住職 山岸智史

この度、五位組役員改選につき四月一日付をもって五位組組長の任に就きました。門信徒の皆様のご指導ご鞭撻を受けながら、共に歩んでまいりたいと思えます。

「最近、市井の人々の「切実なる願いや苦悩」に直面することが多く感じられます。昨年、安保関連法案が国会で審議されたとき、その法案が可決されることよって戦場に送り出される可能性のある多くの若者が国会前に立ち、抗議デモを起しました。また、三月には、待機児童問題で苦しむ子育て世代の本音が吐露されたブログをきっかけに、多くの人が「保育園に落ちたの私だ」というプラカードを持って国会前で無言の抗議デモを実施しました。私は、こういった「切実なる願いや苦悩」を持った人たちにどう共感し共に歩んでいけるかが問われているような気が致します。

振り返りますと、阿弥陀如来の願いは、人々の苦悩に応える形で建立された願いでした。その願いを受け止められた親鸞聖人は「いし・かはら・つぶて」のような社会の底辺にいる人たちと「われらなり」と共感し共に歩んでこられた方でした。多くの人々の「切実なる願いや苦悩」に直面する今だからこそ、親鸞聖人の心に立ち返り歩んでまいりたいと思えます。

共に考え歩んでいきましょう。これからの四年間、よろしくお願い申し上げます。

自坊紹介

旭界山 長光寺 高岡市石堤

「4ページの注参照」

光明寺 本堂改築のご縁に遇つて 門徒総代 杉森修和



長光寺は、石堤の山間に住する寺院である。山号は旭界山と号し、南北朝時代の創建であるといわれる。

寺伝によれば、一三四〇年（興国元年）宗良親王（後醍醐天皇の皇子）の越中入国に従つて、隨身「織田陸奥守氏知」が出家して「超円」と改め、現在の谷内地内に天台宗 旭界山 長光寺と号し開基したのが起源とする。一三六九年（応安二年）一向宗（現在の浄土真宗）に転派し、一五一五年（永正十二年）ごろから興正寺派（現京都市）として教線を広げた。一五六四年（永禄七年）に石山本願寺は、番役費として三五〇文を割り当てた。この額は、往時の越中真宗寺院の個別的な勢力がうかがえる。一五六八年には増山城神保勢の射水郡西条攻撃に際し、砺波郡五位庄門徒を結集して対決するよう勝興寺（現伏木）からもとめられている。

本願寺宗主以外が直接一揆を促すという事例は稀有のことで、勝興寺、長光寺の位置がうかがわれ、五位庄小矢部川流域に強大な勢力をもっていた。

「富山県公文書館文書目録・北日本新聞社発行「富山大百科事典」抜粋

以上が当寺の創建概略で、開基が武士であつたせいか明治期まで常に時の情勢に翻弄される五百年間であつたようである。江戸期には加賀藩二代目藩主前田利長公の正室玉泉院（織田信長の四女）の乳母が八世住職慶永のもとに嫁いでおり、前田公ゆかりの書状等も蔵している。明治期に入り、一向宗が浄土真宗と宗派名を改められてからは本願寺派となり現在に至っている。又、戦後は、門徒会、仏教婦人会、仏教壮年会、仏教青年会、石堤子供会等を結成し幅広く年代を超えて門信徒と共に念仏相続の活動を行っている。



法要 記念祝賀行事・餅撒き 五月二十九日



このたび光明寺本堂改築にあたり、佐加野地内外の門信徒の皆様から多額の御懇志を賜りましたこと厚く御礼申しあげます。おかげさまで今日ここに木の香りも新しい美しい本堂が立派に出来上がりました。

工事を請負つて下さいました森田建設株式会社はじめ工事関係者各位には熱意をもつて取り組んでいただき誠にありがとうございました。工事は、平成二十六年六月から解体の準備にかかり平成二十七年十二月末完工まで一年半かかりました。その間毎週現場監督、お寺の方々、そして私を交えての打合せ会は農繁期もあり大変でしたが有難い体験でした。又、本工事に入る前に御墓の移設を含めた境内地の測量整備の大事業もあり、この件についても関係各位、近隣の方々有難いご理解をいただき、すつきりとした境内になりました。

篤く感謝申しあげます。

光明寺の二百年を超える歴史の中で、旧本堂が念仏をいたたく御同行、御同朋の皆様の御懇念で建立され、長年町内の大切な建物として使われてきましたが、近年傾きも進み、次代に引き継いで行くのが困難だと感じておりました。近いうちに何とかしなければと思っていたところ、住職より親鸞聖人と蓮如上人のご法要を勤修したいとの相談があり、その機に本堂を建て替えたいという思いを打ちあげられました。

私も即座に同意し、関係各位にご相談申しあげ改築工事建設委員会を立ち上げる運びとなりました。

そして多くの尊い御意見をいただきながら会合を重ね、又有難い御懇志をいただいて新本堂が落成し、今日の大法要を迎えられたことは総代としてこれにすぐる慶びはありません。

この本堂改築を機縁として、今まで以上に間法にいそしみ、有縁の方々と共に報恩感謝の日々を送りたいと思っております。

祠堂経法座ご案内

各寺院の祠堂経法座の日程をお知らせします。※日程は変更になる場合があります。

お斎等の詳細については、各寺院にお問い合わせください。

本保 本正寺

五月二十二日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 砺波市 秋知 仁史 師

笹川 廣濟寺

六月三日 朝 九時三十分 昼 二時
六月四日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 高岡市内島 岡西 法英 師

内島 教願寺

六月十日 昼 二時
六月十一日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
法話 富山市水橋 石川 了英 師

四日市 浄明寺

六月十一日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
法話 高岡市伏木 山名 一徳 師

麻生谷 西光寺

六月十七日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
六月十八日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
法話 氷見市布施 圓山 望 師

上向田 浄永寺

六月二十五日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
法話 射水市市井 公文名 眞 師

石堤 長光寺

七月一日 昼 一時三十分
七月二日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
七月三日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
法話 高岡市土屋 山岸 智史 師

赤丸 性宗寺

七月三日 朝 九時三十分 昼 二時
法話 福岡町大野 新原 忠男 師

三日市 光源寺

七月九日 昼 一時三十分
七月十日 昼 一時三十分
法話 高岡市戸出六十歩 林 要昭 師

辻 西福寺

七月十二日 朝 十時 昼 一時三十分
法話 石川県加賀市 日下 賢裕 師

立野 永念寺

八月二日 朝 九時三十分 昼 一時三十分
法話 未定

山岸 珉照寺

八月二十三日 昼 二時三十分
八月二十四日 朝 十時 昼 二時三十分
法話 小矢部市興法寺 立川 証 師

黎明講座のご案内

各寺院の黎明講座の日程をお知らせします。

山岸 珉照寺

七月二十八日 朝 五時三十分
七月二十九日 朝 五時三十分
七月三十日 朝 五時三十分

三田市 光源寺

七月三十一日 朝 六時

笹川 廣濟寺

七月三十一日 朝 五時三十分
八月一日 朝 五時三十分

石堤 長光寺

八月一日 朝 五時三十分
八月二日 朝 五時三十分
八月三日 朝 五時三十分

内島 教願寺

八月十三日 朝 五時三十分
八月十四日 朝 五時三十分
八月十五日 朝 五時三十分

注

「自坊紹介」で、編者が難解と感じた字句には、原文にあるルビ（一部分）を示します。
やまあい きんこう きよつかいさん じでん こうこく むねながしんのう こだいごてんのう けいせい
山間・山号・旭界山・寺伝・興国・宗良親王・後醍醐天皇・慶永・
おだむつのかみうじとも ちようえん かいき こうしようじは せいしつきよくせんいん
織田陸奥守氏知・超円・開基・興正寺派・五位庄・正室玉泉院

五位組 行事予定

第十一回連続研修会

開講式二〇一五年
三月二十九日(日)から
閉講式二〇一六年

第十八回五位組

夏休み子ども大会

二十五日講・平等講

八月上旬

両講合同夏期研修会

本願寺

伝灯奉告法要

十月一日から十期八十日
五位組は二〇一七年四月
参拝予定

編集後記

「兵戈無用(ひようがむよう)」。仏説無量寿経の言葉で、仏が歩み行かれるところは武器をとって争うこともなくなると説かれています。

国会の状況を見ていると、安保法案の強行採決、そして施行されました。戦争の出来る方向へ進んでいると思われまます。今度は憲法改正を争点とした国政選挙が実施されます。「南無阿弥陀仏」を抛り所とした私達はどうかすべきか、祠堂経法要を通して学ぶことが出来ればと思ふところです。

合掌